

# 幼児の言語環境とテレビ

齋藤 貴子

Television and the Language-Environment of Infants

by

Takako Saitō

## 1 情報化社会における言語

ここ数日の間に、筆者は、西ドイツ、ソビエト、アメリカ等の国の方と、街のレストランや劇場で会話する機会があった。（もっとも知っている英語や独語の単語を何とか並べただけの、ひどい会話だったのだが。）こんなに短い期間のあいだに外国の人とこんなに出会うということは、かつてはなかったことである。これも情報化社会に存在しているということの証なのだと、感慨無量の想いでいる。

さて、現代は、情報化社会と言われる時代である。今世紀の科学、技術の発達は目覚ましく、その発達は物質界のみならず、人間界をも大きく変貌させてきた。その中で、学問も多彩に分化し、それが又その発生の土台となった科学、技術の世界を発達させるという循環系をたどっている。大量生産時代に入ってから、人間の生活は、合理的機能的側面が強化され、この大量生産体制が人々の社会機構、生活様式をも改変し、分業化と専門化を促進してきた。

一方、このような科学、技術の発展は、一方では、国際間の経済競争、イデオロギー競争、軍事競争をひき起こし、前世紀にはなかった、大量生産時代に見合った世界的な大戦争を発生させた。

ところが、この国際的な軍事競争に端を発した宇宙開発から通信技術の飛躍的な発達もたらされ、従来の工業製品にかわって、情報の生産が価値を生む情報社会という現代を出現させた。

現在、数多くの通信衛星が地球の周囲を運行し、地球各地の多彩な情報を全地球的に、大げさに言えば宇宙的に中継活動を展開している。

テレビジョンは、この情報化社会を代表するマス・メディア（新聞、雑誌、映画、ラジオ、テレビなどのように、大衆を対象とするマス・コミュニケーションにおける伝達者、伝達回路、伝達内容、伝達機構を支える、あらゆる要素を含めた受容者に達するまでの過程の総称）の花形スターであり、その速度性、情報量と質の豊富さから言っても、他のメディアの情報の強度を凌駕するメディアである。テレビが、音声と映像とによって情報を同時に伝達することを可能にしたことから、人間界に従来なかった変化を生じつつある。

ところで、人類の歴史に言語が登場してから一体どのくらいになるだろうか。現在の科学では、このことについて明解な答は出せていない。F・ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857～1913）以来、言語は、共同体の用いる言語体系をラング Langue, 個人の言語活動をparole Parole と分けてとらえられるようになった。

外的形式としての言語は、音声言語とこれを前提とする文字言語とから把握されていて、人類史的には、前者が後者に先行していたと考えられ、音声言語の原初形態は人間以外の他の動物の

世界にも発見することができる。<sup>7)</sup>

人間にとっては、言語のもつ役割は大きく、ケラーの心理学的実験にもみられるように、人類に最も近似したチンパンジーなどの類人猿類でさえも、その発達の頂点は人間の3歳児程度であり、人間の方はそれ以降も飛躍的な精神発達を展開する。これには、何よりも言語の獲得が関係しているとみたのは、ソビエトの心理学者ヴィゴツキーであり、ソビエトでは、このヴィゴツキーの言語研究を土台に、現在パヴロフの条件反射論を発展させる方向で思考と言語の研究がとられてきている。

ところで、人間の場合、言語は人類の歴史を通じて発達してきており、個人的には一生を通じて発達していくものでもあり、個人の言語の発達は、人類の言語発達史に相似し、又個人の言語の発達は、人類の言語発達そのものをおし進めていくという関係にある。この言語は、人間にとっては、思考の道具となっており、他の人間と意志や感情、思考などを伝え合う際の有力な媒体でもある。

もっとも、思考やコミュニケーションの媒体には、言語以外に写真や絵画、映画などのような映像、音楽などもある。しかし、思考やコミュニケーションの内容が高度になればなるほどに、いわゆる言語との深い結びつきが不可欠となってくる。事実、写真などを一種のことばと見做すような考え方が出てきたのも、又画家が彼個人の世界を意図的に絵に表現し、他者とのコミュニケーションを積極的に行ない出したのもヨーロッパ史ではルネサンス期以降である。太古の時代においては、絵と言語とは今日のように分離しない、一体のものとして人々の中に存在していたと思われるふしがある。

こうして考えてみると、人間の言語の発達は、人間の意識の発達でもあると考えることができる。近代の科学、技術の発達は、この意識の発達とも密接な関係があると考えられる。神秘学の学徒である高橋敏氏も、「近代科学の発生地であるヨーロッパには、時代の変化につれて人間の意識も変化し、その変化は人類の自己実現のために、大きくは三つの発展段階を通して進行するという考え方があるようです。

その3つの大きな発展の過程の第1は、紀元前はぼ八世紀から7世紀、6世紀にかけて人類が決定的に大きな意識の変化を遂げた時までの状態で、それまでの人類は夢のような世界の中に生きていたと言うのです。当時の人間は、今の人間と違って、感覚と感情がほとんど一つでした。たとえば、非常に感じのいい部屋、立派なソファがあり、豪華なシャンデリアがかかり、すばらしい壁かけとじゅうたんとに包まれた部屋にいたとしたら、そして感覚と感情とがひとつだったら、そこにいるだけでいい気分になれるわけですがけれども、今の人間はそういう部屋に仮にいたとしても、心に心配事があったら、決して楽しくはならず、それだけでは、自分のその心の苦しみから抜け出すことはできません。環境と人間の間にはひとつの断絶があるわけです。ということは、人間の感情生活が現在の環境から独立した営みを持っているということです。しかし小さな子ども、たとえば幼稚園に通っているような子どもは、その家庭環境への依存度がおとなの場合よりもはるかに大きいと言えます。家庭の雰囲気明るければ、明るい落ちついた内面生活を保つことができます。ところが家庭にもめごとが絶えなかったり、不幸だったりすれば、その子どももどこか不幸な表情を示します。子どもというのは、環境と自分の内面生活との間の境がおとなのようにはっきりしていません。それだけ外界と自分との結びつきが強いわけです。

環境だけではなく、対人関係についても、似たことが考えられます。——略——

このような意味で、夢の意識を持った古代人の心は、外的環境に対しても内的情動世界に対しても、現代人よりはるかに開かれており、したがって感受性も敏感だったと考えられます。しかしそのかわり、論理的な思考の方はまだ十分発達しておらず、したがって、エジプトの『死者の

書』やホメロスなどが示している心像風景は、夢の世界に近いイメージの連続から成り立っています。この夢の世界が知的にだんだん明るくなり、感情も独立して発達してくるのが、ヨーロッパでは、古代ギリシャのソクラテス前派からソクラテス、プラトンの時代であって、このころ人間の意識の中にまったく新しい現性の力が目覚めてくるわけです。この夢の時代のことを、12世紀末にイタリアでシトー派の修道院長をしていたヨアキム・ディ・フィオレというキリスト教神秘主義者がはじめて取り上げました。<sup>1)</sup>このヨアキムによって父の時代と名づけられた旧約時代は、神が人間を指導しようとしたと説明したあと、さらに高橋は、「この時代には必ず神意を代表する権威者がいて、その権威のもとで人間たちが社会生活を営んでいました。——中略——これに対して、第二に理性が目覚めた時代が来ます。つまり紀元前7、6世紀ぐらいから、紀元13、4、5世紀、或る場合には20世紀まで続いている時代です。——中略——つまり、古代ギリシャルのアルカイック期からローマ＝アレクサンドリア時代、キリスト教時代を通過して近世初頭にいたる約2000年が、ヨアキムの言う子の時代に当たります。子の時代、つまり新約の時代は、恩寵と教化というのでしょうか、すぐに人を罰したりするのではなく、むしろ罪を許すことが、人間を強化するには大切なのであり、同時にひとりひとりが本当に納得できるように、こうしてはいけない、なぜならこういうことをしたらこうなるから、というようにひとりひとりの人間の内面的な生活にまで立ち入って指導することを心がける、そういう時代が『子の時代』なのだ、とヨアキムは言っているのです。」引用が長くなるが、ここは特に興味深い部分であり、あとの子どもの発達にも関連が深いので、もう少し引用を続けたい。

「第3の時代というのは霊的意識が個人の内部だけでも体験できる時代です。ヨアキムは、第2の『子の時代』が更に進化していくと、『子』なる神ではなくて、霊的な意識そのもの、つまり『聖霊』を各人の内部だけでも体験できる時代です。——中略——聖霊の時代、第3の時代になりますと、恩寵と教化ではなくて、愛と自由とが支配する時代になります。その時にはもはやキリスト教の教会も必要ではないし、聖書も必要ではない。勿論あればいいにきまっていますけれども、そういうものが有害だということではなくて、かつてのようには決定的な必要性をもたなくなるというのです。

あるいは祭壇や儀式も、個人の精神生活にとって以前よりも重要ではなくなります。重要なのは、ひとりひとりが自分の内部に眼に見える祭壇を作ることです。ひとりひとりの人間に、一切の聖霊の働きが内在化しているとすれば、自分の内部を探究していくと、自分の内部から必要な行動の指針が必ず出てくるはずで、かつての時代は、誰か偉い先生に質問して、そしてその先生の言うとおりにやればまちがいがなかったわけですけれども、第3の時代になりますと、誰かそういう権威者だけに頼って生きようとしても、それでは生きられないような状況に直面せざるをえなくなるときがきます。<sup>1)</sup>」と。

高橋氏の、この終りの言は、まさに私自身の時代感覚と一致している。

意識を、このようにヨーロッパ的段階史でとらえた時の第3の時代に相当する現代において、その言語の世界の特質を、特に日本人に焦点を合わせて考えてみよう。

テレビ、コンピューターなどに代表されるエレクトロニクス (electronics 電子工学、真空管や半導体内における電子の動きの現象を主として取り扱う工学) が急速の発達を遂げたことで、日本人の場合、大人も子どもも極端に言えば、地球上のあらゆる地域との交信も可能になってきている。その情報の量・質もまた、従来の時代にはなかった豊富さをもっていて、それら情報の価値は多次元的であり、その伝傳のスピードは、音と光のスピードそのものである。音声と映像とによって構成されるテレビの卓越したメディアとしての特性は、今や従来の直接的な人間と人間とのコミュニケーションで形成された信頼感以上の信頼を持って受けとめられるようになっ

ている。

エレクトロニクス的世界の拡大による多次元の価値の共時的存在という時間・空間の中で、人々の意識、感覚も従来の分類論理的人間とは異質なものと育ちはじめており、特にそのような傾向が子どもの上に典型的に現われてきているように思われる。

10年ほど前までの生活では、特定のイデオロギー、もしくは特定の宗教的倫理、地域の伝統的規範などに従順に従ってれば、個人的安泰を得られたし、会社などでの仕事にしても上から与えられた職務を全うさえすれば、批判を受けることがあまりなかった。

しかし、今や、商品の生産は従来の大量生産方式は過去のものとなりつつあり、1品主義の方向へと進んでいるように、人々の価値観も個別化の方向へと進みつつある。宗教も政治運動も、文化運動ですら、単一の価値観や倫理だけでは人々を結集しえなくなっている。さらに又、同一人の世界であっても、多次元の価値が共時的に同居するという構造になってきているようで、それら異った価値は、ある場面ではAの価値が、他の場面ではBの価値が優性になるという具合に、自我の関与のし方次第によっては、まさに分裂症的な世界を創り出すことも多くなっている。このような状態が極端になって、精神病の世界にさまよい出す人間も多くなっている。

さて、このような多次元的な傾向は、やはり、絵画の世界にも現われていたようで、例えば、未来学者アルビン・トフラー Alvin Toffler は、「多次元性への同様な傾向は、絵画の世界でも明らかに存在しており、そこでも、とうてい信じられないほどの多数の流派の創作が行なわれている。具象主義、表現主義、超現実主義、ハード・エッジ、ポップ、キネティックなど数々の流派が同時に世に現われてくる。そのうちの一つか二つの流派がほんのしばらく画廊を飾ることになり、世界共通の標準<sup>2)</sup>とカスタイルが現われることはまずない。要するに、絵画の世界は多元的市場なのである」と。

さらに、この傾向は、コンピューターを導入した企業で働いている人々の間、又同一人の世界にも現われていることを、企業関係のテレビから教えられている。これらの企業では、従来の分業体制的な熟練的な仕事のし方から全体の共同目標に向って各部所がより密接な連携を深めつつ、必要とあらば他のなじみの浅い部所へも容易に転職するというような柔軟性をもった仕事のし方へと全体が変化しつつあるという。つまり、ここでも、多次元の仕事を全体で共有するような構造へと変化しているということである。

ところで、現代人の意識のあり方について、深層心理学者C・Gユング (Carl Gustav Jung 1875~1961) は、興味深い研究を重ねていた。

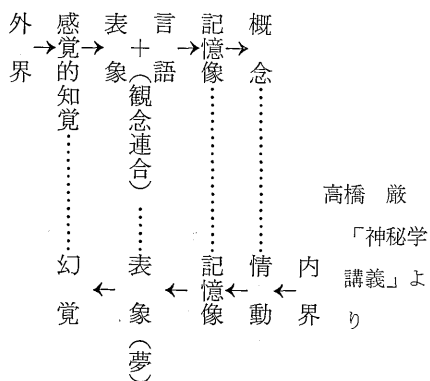
ユングは、意識に重要な役割をもつ言語を3つの側面からとらえようとしていた。

彼によれば言語の第一の特徴は、『語りかけること』であるという。これは、言葉というものが自分にも、他人にも何かを伝達することに機能しているという認識に基づいていたようである。さて、外へ向って何かを伝えようとする言葉は、自分の内なる心(魂)の営みに対して特定の方向づけを与えようとする。彼は、このような側面を言語の第二の特徴としてとらえている。さらに、この方向づけを与えることで、言語は、思考以外の心(魂)の諸機能のある意味で抑圧している。これについてユングは、この機能を言語の第三の特徴としてとらえ、これら三つの特徴が言語の本質であると考えていたようである。このユングの言語のとらえ方は、バヴロフの条件反射の研究から出発するところのソビエトにおける大脳の高次神経活動の研究視点と近似している。

さらに、無意識の世界を問題にしていく中で、ロゴス(ことば、あるいは理性)ではなく、感性による学問の方法、つまりファンタジーによる認識に基づく学問を確立したユングは、論理には外向的論理と内向的論理とがあって、構想力の論理は内向的であり、言葉による概念の論理は

外向的論理と考えていたようである。彼のとらえた論理構造は、図1のようになるようだ。

図1 ユングが考えた二つの論理構造  
 理性的な他人に伝達する  
 ための論理＝外向的



ファンタジーの論理＝内向的

まず、自然的、社会的な環境の世界がある。この世界が知覚、感覚を通して心の中につし出されると、そこに表象や観念や観念連合が生じ、それらに言葉が結びついて記憶像が生まれ、最終的には概念として定着する。これに対して、ファンタジーの形成は、これとは逆のプロセスをたどるという。

まず、内なる世界から或る情念の働きが生じ、この情動作用が心の中に潜んでいる記憶像と結びついて意識の表面で表象を呼び起こす。この魂の奥底からあらわれてきたこの一種の記憶表象は、外向的論理形成の中の表象とはかたちが異って夢に似たあり方、非現実的なあり方であり、さらにすすむと量的には感覚的知覚と同じくらい明瞭な形式をもって、つまり幻覚があらわれてくるという。

人間におけるこの二つの論理のうち、いわゆる言語の三つの特徴は外向的論理が有し、近代科学の立場そのものであり、内向的論理は、この三つの特徴を全然そなえておらず、ユングは、近代科学に代表されるロゴスの論理の世界を内在的に克服できるものとしてこのファンタジーの論理の可能性を探究していた。

さらにユングは、純物質的な世界、生命ある魂の世界の奥底に第三の世界、つまり霊的世界が存在することも示しているようである。人間の精神界を三元的にとらえようとするこのユングの試みは、神智学者、ルドルフ・シュタイナーの人性三分説の立場にも通じているようだ。R. シュタイナー (Rudolf Steiner 1861—1925) の三元的世界とは、次のようなものである。

人間の世界を霊、魂、体としてとらえたシュタイナーは、矛盾する外向的論理の世界と内向的論理の両者を統一するのが霊の世界であり、この三者は循環的な連関をもちつつ高次元へと昇っていくもので、人生は、その高みへと向う修業の道ととらえていたようである。

彼がいうところの霊の統合について、高橋は、「情動作用がいったん知覚の内にぶつかって、そしてもどるときに、同時に判断が、客観的な判断が働いているような場合、しかもそのとき情動も満足をもって終るような場合です。それは美的体験、芸術的体験です。芸術体験が生活に対してもっている意味というのは、そういうところにあって、それは情動の働きを基本としながら、同時に表象と判断をいつも伴っているために、客観的な結論と情動の満足とが同時にあらわれうる唯一の魂の営み」と解説している。また、シュタイナーは、「自我」によるところの12の感覚の融合を重視して、感覚の融合が「自我」に統御されずに霊的体験にいたると、何らかの意味で病的な体験になりかねないとみていたようである。

ところで、小学生・中学生の教育にあたる人たちから「一体、子どもが何を考えているのかわからない」、「その状況とはまるで結びつかないようなことばをパッとと言われてとまどうことがある」というような話を時々聞く。このような大人にとっては一見不可解な現象も、ユング、シュタイナー、トフラーなどの意識と筆者の意識とをかさね合わせることで、一つの表象が浮かび上がってくる。つまり、現代の子どもの場合、多次元の価値の中で、豊かな情報の中で生きていくことで、以前の人間ならばかなりの長期間をかけてふみ込んだ霊的な世界へかなりの早い時期に入れるようになってきているのではないかということ。反面、実生活としての体験が乏しいと、その統合の世界（外向的論理と内向的論理との）も、どちらかと言えば感性的もしくは概念的側面

が優性になってしまい、それが従来、どちらかといえば概念的な大人との間に強いまぎつを生じているのではないかということである。

## 2 乳幼児にとってテレビはいかなる存在か

以前、授業の中で、短大の1年生に「小さい頃のテレビにまつわる思い出」というテーマで作文してもらったことがある。その中に、「自分は、小学校に入る頃まで、テレビに出演する人たちは、テレビの中に住んでいると思っていたので、よくまあこんな小さい中に住んでいられるなあと非常に感心していたものだ」というような作文を書いてくれた人がいた。

また、幼児を対象にした人形劇の公演で、舞台の上に魔法使いのおばあさんが登場すると怖がって泣き出す子や、ずるいネコが登場してくると、怒って拳をふり上げて「ずるいのはおまえだぞ」などと舞台に迫ってくる子がかなりいる。幼児達にとっては、舞台の上も、現実の生活も同質のように思えるところがある。彼らは、大人のように、論理と感性とが分化されておらず、人類の歴史でいえば、ヨアキムのいうところの第一の古代人の心のようなところがあって、外的環境に対しても内的情動の世界に対しても大人よりもはるかに開かれている状態にある。

それゆえに、大人にとっても強力な情報のメディアであるテレビは、乳幼児にとっては、すこぶる強度な情報のメディアになる。しかるに、大人の場合、テレビの情報は、すでに自己の中に形成した概念や表象と照合されることとなりますが、彼らの場合、現実の社会や自然との体験がまだ乏しいわけで、テレビから提供される情報が現実そのものとして受け入れられることとなります。テレビのあるドラマの世界で、殺されたはずの同一人が、すぐにまた他のドラマに登場してくるというタイムトンネルの存在なしにはあり得ない世界が乳幼児にはきわめて身近な現実としてとらえられることとなります。もっとも、このような場面に出合う機会の多い幼児の場合、大人以上に、いわゆる仏教でいうところの転生も容易に直観的に受け入れられる状態になっているのかもしれませんが。

ところで、テレビは、現代の技術では、その伝達経路は一方的であり、大人以上に乳幼児の場合は情報に対して受身的になりやすい。彼らは全感覚を開いて世界に対応しているので、外界の感覚的刺激が強すぎると、自我のコントロールを欠いたまま感覚の融合が促進されることになり、病的な状態に陥る危険性も強い。しかし、テレビの世界のみならず、乳幼児が生きている現代の社会環境そのものも多次元的で、すべての物事も目まぐるしく変化している状況にある。

このような中であって、テレビと乳幼児とのかかわりをどのようなものにと育てていくべきでしょうか。

アルビン・トフラーは、その著『第三の波』の中で、「来るべき明日の文明に向かって、満ち足りた情緒生活と健全な精神的体系をつくり出すために、人間はだれでも、三つの基本的必要条件があるということを理解しなければならぬ。それは、共同体への帰属意識と、社会の構造的な認識、そして人生の意味の把握という三つの条件である。<sup>3)</sup>」と言っているが、テレビと幼児との適切な関係を育てる際にもこの視点を生かすことができる。

特に乳幼児の場合は、人生の土台を形成する時期にあり、肉体的な基礎も、精神的な基礎もほぼこの時期に形成されるという点で他の時期にいる人間とは異質な存在にある。

しかも、感覚、知覚が急速に発達する乳児にとって、その感覚は、いわば全宇宙に向って開いている状態にあるので、その環境の自然的、社会的、人的特質は、その感覚、知覚の発達に大きな影響を及ぼす。しかも、それら外界との出会いには、大人の媒介如何が大きく関係しており、乳児は、大人との情緒的、感情的なコミュニケーションをベースに、この外界とかかわりをもつ

という位置にある。

それゆえ、テレビとのかかわり合いを考えるにしても、この乳児期の発達の特質を考慮して、また、現代の未来の社会の構造をふまえて（多次元の価値が共存するような）、そのような未来の社会への帰属を可能ならしめるような資質をテレビとの関係の中でも育てていく必要がある。しかし、これは、テレビとの中だけで形成されるものでもなく、全生活体験の中で形成されるような援助が必要となる。とりわけ、自我の形成は受身的な生活の中では育たない。乳児のねがえり行動のような中にも、すでに自我の萌芽が認められるところから、あらゆる生活面で、自我の形成を援助していく保育が演出される必要がある。一人で動きまわられる幼児に対しては、テレビにはりつけておかず、自発的な活動＝遊びができる機会を大いに与えてあげることが、エレクトロニクス時代になる程重視されねばならない。実体験が豊かである程その外向的論理の側面も、内向的論理の側面も霊界の発達もより人間らしい輝きを帯びてくることとなる。

### 3 エレクトロニクス時代に見合う生活を乳幼児とともに創造しよう

未来学者、アルビン・トフラーは、「今、オフィスで、家庭の中で、学校内で、人類がかつて経験したことのない大変革がひそかに進行している」とし、この大変革を第三の波と呼んでいる。彼によれば、

「人類は、これまで、大変革の波を二度経験している。それぞれの波は、変革以前の文化、あるいは文明を大幅に時代おくれにしてしまい、前の時代に生きていた人間には想像すらできなかった生活様式を一般化した。第一の波による農業革命は、数千年にわたってゆるやかに展開された。産業文明の出現による第二の波の変革は、わずか300年しかかからなかった。今日では、歴史の進行はさらに加速されており、第三の波はせいぜい2、30年で歴史の流れを変え、その変革を完結するのではないだろうか。したがってわれわれは、たまたまこの衝撃的な時代に地球上で運命を共にするわけだが、自分たちが生きている間に、第三の波の衝撃をまともに受けることになるであろう。——中略——第三の波によってつくり出される新しい文明の多くの部分は、古い伝統的な、産業中心主義が生んだ文明とはそぐわないものだ。それは、高度の科学技術に支えられていると同時に、反産業主義という性格を持っているのである。

第三の波は、まったく新しい生活様式をもたらす。その基盤となるのは、多種多様な、再生可能なエネルギー資源であり、大半の流れ作業による工場生産を時代おくれにしてしまう新しい生産方式である。また、核家族とは異なった新しい家族形態『エレクトロニック住宅』とでも言うべき新しい職住一致の生活、様相を一変する未来の学校や企業などもその基盤となる。来るべき文明は、われわれの新しい行動規範を打ち立て、第二の波の社会の特徴である規格化、同時化、中央集権化といった産業社会の制約を乗り越え、エネルギー、富、権力の集中化を越える道を拓いてくれる。」<sup>3)</sup>という。

確かに、この時代の波は、現代人がそれぞれの受けとめ方の中で感じているはずである。テレビ、コンピューターに代表される情報化社会にあって、未来の社会はエレクトロニクスに支配された人間性喪失の社会ではないかという危機感を深めている人も多い、事実数年前の筆者自身のような状態にあった。このトフラーの未来の展望は、何か明るい光を与えてくれる。しかし、この波を切り拓いて行くには、大変な困難を伴うはずである。

ここ数年、どこの教育現場（学校や各種の保育施設など）に行っても、多くの子供達の発達が歪んでいるという話を聞く。<sup>6)</sup>そして又、その歪みの原因が科学・技術の発達にあると断定してしまう人も多い。

科学・技術は、はたして人間性を喪失させてしまうのだろうか。

ところで、興味あることに、現代の科学・技術の最先端部では、人間不在ではなく、むしろ、従来の大量生産時代には軽視されつつあった熟練した人間の勤が再び必要とされはじめているという。勤という、いわば客観的ではない感性の世界と、最先端の科学・技術とが、そこでは新しい統合をみせているわけである。ユングの言う内向的論理（感性）の世界と、外向的論理（理性）との世界との統合が、そこに生じているのである。しかも、両者は、互いに影響を深め合いつつ、独自の発展を遂げつつ、よりハイレベルの統合を志向していくわけである。

この中に、これからの人々の生きる目標が隠されているように思える。科学・技術的な能力をもった人間の世界を築いて行くか、または感性豊かな人間性を築いて行くかの二者択一ではなく、科学・技術のより高度な発展は、必然的に豊かな感性に裏づけされているように、これから人間は、科学・技術的な能力も、感性の豊かさも合わせ持つ方向へと発達すべく、各自が自の人生の設計プランを持って（ひとり、ひとりが自分の内部に眼に見えぬ祭壇を作って）それを実現していくことが求められるようになるだろう。一方、それを実現していく共同体のメンバーの価値観は、より多次的になっていくわけで、その共同体づくりには、その社会の構造を把握する力、メンバーの人間性の構造を把握する力（自身をも）さらにそれらを生かし発展させていくような力（愛と自由とに満ちた）などが要求されることになるだろう。特に後者の創造性が、これから一層重視されることとなるだろう。

シルバノ、アリエッティ(Arieti S.)によって「魔術的総合」と、またロロ・メイ(May, R.)によって知的・意思的、情緒的機能が一緒にはたらく超合理的なものにとらえられた創造性について、ポルトーランスも、その著「創造性修業学」の中で、未来は創造性を必要とする時代になると述べ、これからの両親、教師の役割について、

「社会的、技術的变化が将来加速化するという事実は、家庭、学校、事業所、政府にとって別の意味をもってくる。情報の量やその情報を駆使する技能を獲得するために必要な教育の中身が急増するだろう。それと同時に、情報や技能を不断に更新し、現在に通用するものにしなければならぬ。手の込んだ自動的データの処理と伝達のしかたも要求されるだろう、たとえば、すでに家庭用コンピュータが550ドルで売り出されている。このことは、両親、学校関係者、産業界や他の社会機関が行なう教授の役割に大きな変化をもたらすことになる。学校での教師の役割は、『授業における聴き手、教科書に書いてあることの再説明者、誤りの訂正者』から創造的思考や問題解決、相互依存やチームワーク、そして学際的思考といった学習経験や技能のマネージャーとか開発者に変わらなければならなくなる。これと同様な教授の役割は当然、両親、経営者、あるいは産業界における管理者なども果たすことになる」として、未来の社会（すでに現在も含まれていると考えてよいだろう）の構造と、そこに生きる人間に創造性がいかに重要であるかについて述べている。

ところで、筆者自身は、最近になって、やっとマイコンの世界に足を踏み入れたばかりなので、この世界のことについては未知の部分が多く、広漠たる原野を前に立っている心境であるが、それでも、足を入れてみて、以前は、コンピューターは、人間を受身の生き方を強める方向にひっぱっていくものとして見ていた偏見が誤りであったことを発見している。マイコンを扱うには、何をしたいかという自分のビジョンを持ち、しかもそれを相手（マイコン）に特別な言語を使って伝える必要がある。しかも、自分のビジョンを実現するプロセス（プログラミング）には、実に、プログラマーの概念的特質と感性的特質とが反映するようである。

ところで、以上のことを踏まえて、幼児とテレビとの関係のあり方について考えてみよう。テレビが、いかに乳幼児の発達をむしろむしばんでいるかを指摘する人は多い。しかし、そのような結論



を下すに必要なデータは殆んどみあたらないように思われる。問題は、テレビのどんな番組をどのように見たかであり、しかも、その番組は、幼児の世界とどうかかわったかということであろうし、又大人自身その番組をどのような価値観で評価したかであり、大人自身、テレビを活用した創造的な世界を幼児との間につくり得たか、又形成しようとするビジョンを持っていたかであり、テレビと他の生活場面をどう結びつけて発展させたかという側面の研究がより重要であろう。テレビの場面だけでなく、他の生活の諸場面とも関連させながら複眼的思考で生活を創造していく時、テレビにまつわる問題性も発展的に解決されていくのではないだろうか。

#### <引用, 参考文献>

- 1 高橋巖, 「神秘学講義」, 角川書店, 1980
- 2 アルビン・トフラー, 「未来の衝撃」徳山二郎訳 実業之日本社, 1971
- 3 アルビン・トフラー, 「第三の波」, 徳山二郎他訳 日本放送出版協会, 1981
- 4 マーシャル・マクラーハン編著, 「マクラーハン理論」, サイマル出版会, 1981
- 5 遠藤邦武, 「視覚伝達論」, 東京デザイナー学院出版局, 1973
- 6 是沢三郎編, 「今, 教育の現場で」, 新潟日報事業社, 1981
- 7 テインベルヘン, 「動物のことば」, みすず書房, 1971  
渡辺 他訳
- 8 高田哲雄, 「デザインの発想」, 新潟青陵女子短期大学, 1981
- 9 ポールトランス著「創造性修業学」, 東京心理, 1981  
佐藤三郎他訳,
- 10 「現代用語の基礎知識」, 自由国民社, 1981